東日本大震災被災地応援実行委員会たより

轍わだち

2013. 10. 11NO. 48

あの日、そして今、これから

人も、町も、何もかもを一瞬でさらっていったあの日から、今日は2年と7ヶ月です。

「被災地にはまだ多くの支援が必要です。取り分け両親を亡くした4，７００人の子ども達への支援が必要です。」こう訴えるのは日本ユネスコ協会連盟会長です。改めて両親を失った子供の数に愕然としました。「外で思い切り遊ばせてやりたい」こう訴えるのは福島の母親たちです。海で、山で、川で思い切り遊んだ経験は大人になっても大切な思い出になります。その機会が奪われ続けています。ましてや、福島第一原発の汚染水流失問題は、更なる健康被害の不安を増幅させています。**昨日段階での死者は、１万５８８３人、行方不明者２６５２人、避難・転居者は２８万６００６人、**長期化する避難生活、厳しい生活環境による疲労やストレスで心身を病む人々がいます。

私たちが今、これからも大切にしたいことは、被災地の方々が、痛みを背負いながら明日に向かって歩み続けていることを「忘れずに、見守り、寄り添う」ことでしょう。

3，11後を生きる『なぜ』と問わない

古本チャプレンが朝礼で紹介された本です。その中にこんな記述があります。私たちが、これから成せることがあるとしたら、それは何かを示唆していると思います。

時間の経過とともに、奇妙な感情失禁に陥ったように思います。（略）いきなり涙がポロポロ出てくる、横隔膜がヒクヒクとけいれんして「うっうっ」と変な声が出てきて、恥ずかしくて歩いていられない。しょうがないので外に行くときにはサングラスと大きなマスクをして顔を隠して歩きました。（略）

考えてみれば当然です。自分の友だちや親戚が、ああ、ここで死んだんだなあと思ったらたまりません。それに昔からの思い出が全部つまっている自分のふるさとの町がめちゃくちゃになってしまって、ネズミの穴まで知っていたのが、すっかり何もかもなくなってしまった。あの喪失感というのは、やはりかなり厳しいものがあります。

寄付金感謝

今年も生徒会は、文化祭模擬店の売り上げの一部を東日本大震災被災地応援実行委員会に寄付することを決定して頂きました。

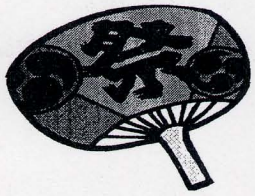
また、保護者会も、バザーや模擬店の売り上げを寄付して下さいます。

このような支えがあるからこそ実行委員は頑張れます！有り難うございます。

リレートーク

９月１４，１５日、私は東京で開催された第６９回日本ユネスコ全国大会に参加してきました。今年のテーマは、東日本大震災です。従って講演・パネルディスカッション、発表などいずれも、被災地の現状と、被災者の思いが丁寧に伝えられていました。また、会場のエントランスには、被災地の子ども達が描いた絵が壁一面に掲示され、どの絵にもメッセージが込められていました。

まず、この間の２年半ユネスコは、被災地域の学校・先生・生徒たちが必要としている緊急物資支援に取り組むと共に、次いで、奨学金・文化・祭りへの支援に取り組んできました。



なぜ祭りなのか？と思いましたがその疑問は祭り復活に取り組んできた方の発言を聞き納得しました。**祭りや郷土芸能は、人々の心をつなぐ地域の宝物だからです。**被災地から避難した人たちもその日再び故郷に戻ろうと思うだろう。また避難した人々の所に足を運んで励ます事も出来る。だから、失った太鼓や衣装・道具を復元していく活動が大切だと…

奨学金のための基金を立ち上げ多くの中学生・高校生の修学支援は本当に大切です。

奨学金を受けて、通学できている中学生２人、高校生１人が震災で学んだことについてこの様に発言していました。

「被災し希望していた学校を諦めなければと思い、気を落としていた矢先奨学金が受けられる事を知り、お世話になりました。**震災で学んだ事は人の役に立つ人間になること**の重要さでした。今そんな人間になるために亡くなった友人の分まで学業に力を尽くしています。」また、「津波は忘れない、津波を引きずらない」とこれからの生き方への決意を力強く発言していた姿が印象的でした。

悲しさも、寂しさも胸に抱えながら今を一生懸命生きている

その姿を、宮古市の田老第一中学校の先生が報告されていました。田老地区は「万里の長城」に例えられる巨大な防潮堤が建設されていたにもかかわらず、その防潮堤を破壊し津波が町を破壊した地区です。

「被災地の復興には平和な世界」が必要

ユネスコ特別顧問の千　玄室氏が強調されたことです。今回の被害に対しての支援が世界中から寄せられた事を感謝し、このような支援は友好関係があるからこそ可能である。世界が平和であってこそ、互いを助け合い、励まされる関係が生まれる。これが震災で我々が学んだことであると…。

今井　千和世